

たくさんの経験を通して、語れる何かを作れ！ 生真面目に過ごした先輩からの「遊びのススメ」



日本テレビアナウンサー 菅谷 大介さん
すが や だいすけ

日本テレビの看板アナウンサーの一人であり、たくさんのレギュラー番組を持つ菅谷大介アナウンサー。

千葉大学法経学部出身の菅谷アナに、大学時代や就職活動の思い出、そして仕事にかける想いを伺いました。

【PROFILE】

千葉県出身、日本テレビ編成局アナウンス部。千葉大学法経学部を卒業後、国際基督教大学大学院に進学、修了後にアナウンサーの道へ。「news every. サタデー」「メレンゲの気持ち」「あなたと日テレ」などを担当するほか、「箱根駅伝」「プロレスリングNOAH中継」「NFL中継」の実況など、多方面で活躍している。

生真面目だった 千葉大学時代

「千葉大学に入学しようと思ったきっかけを教えてください。」

もともと僕は千葉の生まれです。通っていた高校が千葉東高校だったんです。高校の3年間を西千葉キャンパスのすぐ隣で過ごしたこともあって、千葉大学にはずっと親しみを感じていました。ですから、「大学で法律の勉強をしよう」と思った時には自然と千葉大学が選択肢にのぼって来ました。

「学生時代はどんな生活を送っていましたか？」

今振り返れば、比較的真面目な学生だったなと思います。就職課程も取っていたので、2年生、3年生の時は1限から5限まで授業でびっしり。授業もほとんどサボらず（笑）、空き時間に第一食堂で友だちといろんな話をする程度。並行して塾のアルバイトに励んでいたのも、サークルに入ることもありませんでした。専攻は国際法で、ゼミは小森光夫先生（現・北海道大学、千葉大学名誉教授）でした。4年間を振り返れば、とにかく勉強はしたなと思います。

「その後、国際基督教大学（ICU）の大学院に進んでいらっしゃいますね。」

実は、進路を考えたときに二つの道がありました。それは、教員になる道と、大学院に進んで勉強を続けること。大学院進学については「大学生として、まだまだやっていけないことがたくさん

あるんじゃないか？」と感じたことが動機のひとつになりました。というのも、僕は旅行に行く、とかスポーツを思い切りやる、といった大学生らしいことをまったくやっていなかったんです。ちようど、教員採用試験に受かったにもかかわらず、その年の募集がなかったこともあって、大学院へと進学する道を選ぶことになりました。

「そのとき採用枠があれば、アナウンサーの菅谷さんはいなかったんですね。千葉大学から違う大学院に進まれた、どんな変化がありましたか？」

まず、大学のカラーが大きく異なります。千葉大学は自分もそうだったように、勉強を一番に考える「真面目」な人が多かったんです。対して、ICUは、同じくらい遊びに対して全力。さらに、留学生や帰国子女が多いということもあって、自分の意見を表に出すことが求められました。アイスカッションも多かったですね。

「アナウンサーの道を選んだきっかけは、どのようなことだったのでしょうか？ また、難関のアナウンサー試験を通った秘訣はありますか？」

僕にとってアナウンサーは中学のときの憧れの職業でした。逸見政孝さんのご活躍を見て、「こんな風に人を楽しませる仕事がしたい！」と思ったんです。逸見さんは、シリアスな報道番組もできれば、バラエティもできる「面白真面目」なオールマイティな方です。今でも目標にしています。

「アナウンサー試験については、実は、大学時代に一度失敗しているんです。というのも、大学時代の僕は「アナウンサーになる」ことが目標で、「その職業について何がしたいのか？」「何ができるのか？」が明確ではなかったんです。そんな甘い分析では受かるはずもないですね。大学院の時のアナウンサー試験では、当時の失敗を生かして、自分を分析しアピールす



ることができました。

言葉の持つ力で、たくさん の人の笑顔にしたい

「アナウンサーという職業の醍醐味は何ですか？」

ミーハーな面では、たくさん芸能人に会えることです（笑）。そして、私の言葉をきっかけに、人生が変わるような経験をする方がいることに、感動と大きな責任感を覚えます。以前、「リアルタイム」というニュース番組のあるコーナーで「ムコ多糖症」という難病を支援する湘南乃風の活動を紹介したことがありました。その放送を見た、「ムコ多糖症」のお子さんをサポートする方が、外に積極的に出ることができるようになった、というお話をのちに聞いたことがありました。このときは、月並みな言葉ですが、テレビの持つ力、言葉の持つ力のすごさを感じました。

私は、「言葉を使って、人を楽しませたい、元気にしたい」とこの仕事を選びましたが、まさにそれを実感できた出来事だったと思います。

「菅谷さんのお仕事といえば、スポーツ実況なども印象に残ります。ありがとうございます。スポーツ実況を行う場合、一番大切なことは事前

にしっかりと取材をすることです。たとえば、箱根駅伝であれば、各大学に自ら取材を申し込んで練習を拝見したり、選手や監督に話を伺ったりします。その積み重ねがあるからこそ、たすきりレーのわずかな数十秒の間に、選手一人ひとりのドラマを語ることが出来るんです。机上の知識ではない、足で、目で、耳で得た経験があるからこそ、見る人に届く力のある言葉になると思います。

「テレビというと、華やかな世界の道なお仕事も多いんですね。」

もちろんです！一週間のうちにテレビに出演している時間はごくわずか。そのほかは、調べ物をしたり、取材をしたりという「準備」のための時間です。報道するという立場から、さまざまな勉強をしなくてはなりません。大学時代にたくさん勉強してい

菅谷大介さん 一問一答



Q 千葉大学でお気に入りだった場所は？
A 生協の上にあったWisden。まだあるかな？

Q すばり、大学で学んだ知識は役に立っていますか？
A はい。特に、国際法やサステイナブルディプロップメント（持続可能な開発）などの講義は、今の報道現場でも役に立っています。

Q アナウンサー人生を変えた番組は？
A 初めてのレギュラー番組の「スーパージョッキー」。熱湯コマーシャルのちよつとHな言葉を、日テレの屋上で何度も叫んで練習しました（照）。

Q アナウンサーって休日はあるのですか？
A 会社員ですから、基本は週休2日です。土日というわけにはいきませんが、しっかりと休み、子どもと遊んでリフレッシュしています。弓も引きっぱなしでは緩んでしまいますからね。

Q 「好きなアナウンサー」ランキング、気になりますか？
A もちろんです！でも、実際にランク入りしたのは、「嫌いなアナウンサー」のほうでした。安住アナ（同期）がうらやましい（泣）。

Q よかったら、千葉大学に遊びに来てください！
A ぜいー実は、卒業以来一度も足を運んでいないんです。誰か呼んでくれないかな？

たおかげで、あまり苦ではありませんね。辛いときは「あの頃あれだけ勉強したんだから大丈夫だ！」と自分に言い聞かせています。

「今後のますますの活躍を期待しています。最後に、千葉大学で学ぶ後輩たちに、メッセージをお願いします。」

大学時代というのは、自分の時間を存分に使うことができる期間だと思います。私は勉強に明け暮れてしまいましたが、だからこそ、皆さんにはたくさんの経験をしてほしい。経験に基づいた言葉には、知識で得ただけではない「力」があります。多くの体験を通して「何かを語れる力」をつけてください。

テーマ 千葉大学の未来を語る

千葉大学をもっともっと良くするために、できることはなんだろう？
そんな疑問と期待を持つ4人の学生たちが学長室に集まって座談会を実施！
今回は90分にわたって大いに盛り上がった、その様子をレポートします。



- 文学部2年 西 征耶さん「千葉大学の良さをもっとみんなに知らせたい。もっと大学の発信力が欲しい」
- 教育学部3年 古賀 千絵さん「留学生との交流をもっとよくしたい。大学の中のグローバルズムを充実させたい」
- 工学部3年 梓澤 翔吾さん「今の授業はつまらないものが多い。もっと知的好奇心をくすぐるような面白い授業に改革すべき」
- 医学部1年 難波 俊文さん「まだ入学したばかりだが思うことは色々ある。学長と同じ学部なので、その点についても話してみたい」

学生から学長へ。率直な学長の意見を聞いてみたい！

大学の情報発信が足りないのでは？

西 学内・学外への情報発信について質問します。先日図書館の閉鎖やアカデミックリンク・センターの開設など、学内のできごとに対して、あまり情報が発信されていないと思います。

学長 それは非常に残念なことです。私たちも学生たちにそう思われてはいないかと。という懸念はいつも持っています。大学組織の中では広報や情報発信の担当者が頑張っていますが、まだまだ手段などが古いかも。ちなみに、広報ツイッターを始めたのは知っていますか？

西 去年の9月からですね。すごく良いと思います。でも、SNSで教授と学生がつながるなど、もっといろんな使い方ができると思っています。リスク管理など、問題点はあっても、とにかくやってみることは良いことだと思います。

学長 多くの教員が、SNSを活用したい、という気持ちは持っていると思います。ただし、リスクもありますので、まずは広報から始めていくのが現状です。こうした新しい試みには、ぜひ学生の意見を取り入れたいと思っていますが、いかがでしょうか？

なる個人の意見だけではなく、ある程度広く学生を代表するような形での意見、視点が欲しいのです。

梓澤 学生に、公的な場に参加して欲しいと思っていますか？



学長 もちろん。ただそれは、個人が自分の希望を言ったためではなく、学生全体の代表として参加すること。そして、毎年必ず誰かが参加する継続性になりますね。

留学生との交流は？ 溝は？

古賀 大学にもグローバル化が求められる中、英語力フェが新しく設立されますが、このように留学生と日本人学生との交流できるようなシステムをもっと作る予定はありますか？また、双方にある溝をどのように捉えていますか？

学長 国際化という点でのエピソードをひとつ。私が中国に行けば、2日もかけて遠くからやってきて会合に出席して「千葉は私の第二の故郷です」と話しかけてくれる卒業生がいます。これは嬉しいことです。ただ、密なる交流をするという点では難しい部分もありません。今回の英語ハウスで、英語での会話に対するハードルが低くなれば、留学生との交流も活発になると期待できます。しかし、親しく交流するというのは英語だけの問題ではなく心を開いて友達になるという心も大切です。

古賀 英語力フェの構想は素晴らしいものだと思いますが、1,000人以上いる留学生のほとんどは、英語が母国語ではありません。多様性という観点からも、英語以外の言語についてももっと取り上げられるべきではないでしょうか？

学長 その通りですね。今回の英語力フェを構想した時、私はまさに古賀さんのような意見が出て来ることを望んでいました。これをきっかけに、中国語やタイ語、その他の言語に発展してインターナショナルハウスに成長することを期待しています。

必修科目が多くて、他学部の講義が受けられない！

梓澤 僕は工学部に在籍していますが、非常に必修科目が多々と感じています。千葉大学は総合大学であるのに、文学部や法経学部の有益な講義がなかなか受けられないのが現状です。総じて文系学部に対して理系学部は必修科目が多いように感じますが、カリキュラムの見直しはないのでしょうか？



学長 梓澤君は、私が構内を散策していた時に、「今の千葉大学の授業は面白くない」と訴えてきたこともありましたね。私は、非常に感激してすぐに改善のための調査を始めたことを覚えていますが、カリキュラムのこと、授業のことなど、忌憚のない意見を、もっと私たちにぶつけてください。学生の皆さんは、「私人の意見なんて、誰も聞いてくれない」と思うかも知れませんが、とんでもない。学生の声を取り上げようという機運は、確実に育っているのです。必修科目のこともすぐに調査しましょう。学生の力が欲しい時は協力して下さいね。

キャンパス間の交流で総合大学の強さを！

難波 私は医学部の1年生です。千葉大学は、文部、西千葉、松戸、柏の葉の各キャンパスがありますが、あまり各キャンパス間の交流がないのでは？と感じています。先ほど梓澤さんが話したように、総合大学としての千葉大学の魅力をもっと向上させるには、このキャンパス間の交流も重要だと思いますが、いかがでしょうか？

学長 キャンパス間の交流が難しい一番の理由は、物理的な問題です。けれども、共同研究やサークルなどで、他の学部の人と接する機会はあると思います。難波君の理解が深まっています。それで、カリキュラム委員会などへの働きかけをしてみよう。総合大学というのは多くの可能性をほらんでいるのです。

難波 僕自身、千葉大学の医学部に入学した理由は、単科の医科大学に比べてもっと広く多くのことを学べると考えたからです。そして、多彩な普遍教育授業を受け、その考えがもっと強くなりました。現在、国立大学というのは、全国に86校もあります。生き残るためには個性が必要ですし、その個性のひとつが総合力ではないかと考えています。

学長が考える大学改革とは！

梓澤 もうひとつ質問させてください。巷では大学改革と騒がれていますが、学長が考える改革とは何ですか？

学長 国立大学には経営の視点が必要だと社会からいらわれています。大学の経営マネジメントとは、一言でいえば、人材の育成です。だから、大学の改革とは、すなわち、人を成長させ、改革することなんです。ある調査によれば、千葉大学は一定の予算に對し、高いレベルの論文を輩出するレベルは日本一のことです。このレベルをさらに高めたいですね。



学長から学生へ。リアルな学生の姿を聞いてみたい！

感動できるのも能力なんです！

学長 それでは、私からも質問をさせてください。最近、最も感動したことは何ですか？叫びたいくらい嬉しかったこと、悲しかったことでもいいので、心を揺り動かされたことを教えてください。



梓澤 僕は今年1年、大学を休学して海外に行きました。アルバイトをしてお金を貯めてパリに旅行に行きました。そこで出会った友人と小さな島に出かけてビーチで浮かんできたときに、「僕の人生で最高だと思いました。」というも、工学部に行って研究していい会社に入って...それもいいかもしれないけど、結局は井の中の蛙。その時僕は、少しその井戸から突き抜けることができたのではないかと、思ったからです。

古賀 私は昨年行った東北でのボランティア活動です。福島ではどのように情報を集め、伝達するかというソフト面が求められ、津波の被害があった宮城では、住宅支援というハード面が求められました。正直、宮城では自分が役に立たないのでは、と悩んでいました。でも、実際には福島で学んだことが、宮城でも生かすことができたのです。自分が得た知識がほかのものと一緒に、さらに発展できたことに大きな喜びを感じました。

難波 僕は、自分が所属している医学部の野球チームが一部に昇格したときです。このチームは、6年生を含めて9人しかいなくて秋の大会の参加も危ぶまれたのですが、6年生の3人が引退を延ばしてくれて、朝の6時から練習を続けて大会に参加。一部への昇格を決めることができました。その瞬間は非常に感動しました。

西 僕は、面白い人と出会った時、そして誰かから「お前と出会えてよかった」といわれた時にもすごく感動します。僕にとって生きることとは人と出会うことだと思っています。だから、こうして学長と出会って話していること、ここにいらっしゃる皆さんと話せることに感動しています。



学長 皆さん一人ひとり、いい感性を持っていると思います。皆さんが感動したひとつのことは、もしかしたら他人なら何も思わずにやり過ぎてしまつことかも知れない。でも、皆さんはそれを見つけて感動できる能力がある。すばらしいことです。若い世代であれば、もっとのめりこむような思い入れがあつてもいいのです。少しくらいバランスを失って、徹底的に何かに肩入れすることも大切だと思います。あなたたちなら、きちんと軌道修正していける能力があると思つ。そこで、今日は敢えて皆さんの心揺さぶられることを聞いてみました。

Talk Ja

齋藤学長と学生代表の

2012年 新春特別企画



MEME

最後にみんなで、千葉大学の未来のために！

今こそ公平で自由な学生団体を！

西 先ほど学長は、大学の運営や方針決定にも学生が参加して欲しい、とおっしゃいました。それを実現するためにどのようにするべきか、学長の考えを聞かせていただけますか？

学長 まず大切なのが、個人は勿論大切ですが、学生の意見をまとめてその代表として、そして継続的に参加できるようにすること。そして、何よりも重要なのは「公平で自由である」ことです。どちらかが勝った、負けたという気持ちを持ちたり、管理する、監視するといった行動になると、本来の意味からはずれてしまいます。互いの考えをオープンにすることで、より良い方向に行くことがミーティングの目的であるべきでしょう。

梓澤 僕はずっと、授業をもっと良くしたい、向上させたいという気持ちで、毎回学長に訴えてきました。でも、授業に限らず経営のことやポフンティア派遣のこと、留学生のこと、キャンパスの交流の手法など、いろんなことを網羅して考える学生団体が必要なのかなと思いました。

学長 まさにそうだと思う。たとえば、今話題になっている大学の秋入学だって、学生の意見を聞かずに決められるものではありません。そういう機会があって、大学が大きな決定をする際には学生と意見交換を行うということが出来れば、これ以上に良いことはないでしょう。

古賀 団体の構成を考えるときにも注意が必要ですね。代表を決めると、「自分には関係ない」という学生が必ず出てきます。でも、そういう学生も巻き込む必要があるし、代が変わっても資産が受け継がれるべきですね。

難波 たとえば、各学部から1名代表者を出すような形にすれば、継続的に運営することができると、横のつながりもできて不公平感がなくなりますよね。しかし、「これまでずっと学生の団体がなかったのか」も検証しなければならぬと思うのですがいかがですか？

学長 それは、昔からの歴史に負うところが大きいですね。学生団体は作ってはいけない、集会の場所を学生に与えてはならないといった風潮が本学だけではなく大学にはあったかもしれません。でも、今は学生の皆さんも高い意識を持って行動しようとしています。そんな問題は大きなことではないと考えていますし、信頼しています。

ライブ中継で開かれた大学をアピール！

西 最後にひとつお願いがあります。今後、僕たち学生がきちんとした団体を作った時には、今回のような座談会をぜひ、ユーストリームやニコニコ動画などで生中継させてください。開かれた大学を一緒に学内外にアピールしていただけますか？

学長 いいですね。そういう機会があればいいと思います。今日はたくさん話が聞けて面白かったです。

4人 僕たちもやりたいことの方が見えた気がします。ありがとうございます。



〈座談会を終えて……〉

座談会を終えた4人の皆さんに、感想を伺いました。

難波 大学のことを隔々まで見て、真剣に考えていることが伝わってきました。たくさん質問・疑問を温かな雰囲気の中で受け止めてくれたことにも感動しました。

古賀 学長の人柄が見えた時間でした。特に、「感動」を非常に大切にされていることに感激しました。こうして近くで直接話せたからこそ、伝わる思いがあるんだなと思いました。

梓澤 「クレーム」とも言えそうな僕たちの意見を、むしろ積極的に聞きたいという、その人柄の大きさがすごいです。「学長」と「学生」というポジショントークではなく、一人の人として接してくれたことに感謝しています。

西 僕たちが「大学は何を考えているんだろう」ともって情報を知りたい」と思っていたのと同様に、大学も学生の意見や考えを知りたかったのだ、ということに気づきました。新しい団体づくり、頑張ってみます！



来る2月29日(水) 13時からけやき会館大ホールにて 第3回「大学改革シンポジウム」 がおこなわれます。

※西さん・梓澤さんが登壇します。

「アカデミック・リンク」 まもなく始動！



竹内比呂也
附属図書館長
アカデミック・リンク・センター長

考える学生を創造する

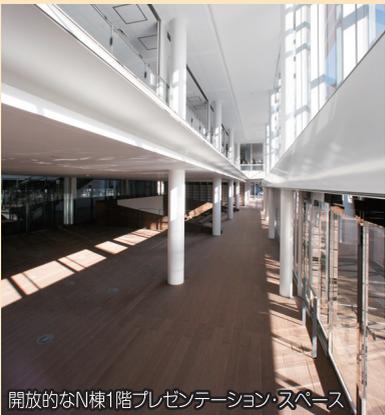
「アカデミック・リンク」。

N棟、1棟が3月16日(金)にオープンします。

アカデミック・リンクは、附属図書館旧館

の耐震改修を機に構想された、千葉大学の新しい学習環境です。この環境の下、学生の皆さんが「自発的に学ぶ」ということを習慣づけ、これからの知識が重視される社会を生きるために必要な知識を活用する力を身につけることを期待しています。

新しくできたN棟、1棟は、これまでの図書館(L棟、K棟)が持っている図書館的な良さを損なわないようにしつつも、今日の高等教育にふさわしい新たな学習空間、学習スタイルを提案するものです。建物の基本コンセプトは「見る」「見られる」ということにあります。なぜなら、人は、他の人たちの知的活動を見たり、自分たちの活動を見られることによって、知的刺激を受けるからです。N棟1階のプレゼンテーション・スペース、4階のガラス張りのグループ学習室は、このような意図に沿って設置されたスペースです。また、多様な学習スタイルに対応するために、N棟2階、3階の学習スペースでは、机、椅子を自由に動かすことができるようになりました。しかし、空間だけが豊かになっても意味がありません。それゆえ、学習資源としての様々なコンテンツが様々な形態で提供され、アカデミック・リンク・スチューデント・アシスタント(AISA)による学習支援も実施されます。このような空間、学習資源としての人的支援が体となった新しい学習環境を皆さんぜひ活用してください。



開放的なN棟1階プレゼンテーション・スペース



N棟4階のガラス張り学習スペース



アカデミック・リンク外観

TOPICS

千葉大学が柏市と 包括的連携協定を締結

千葉大学では、地元キャンパスを有し、環境・教育・福祉・街づくりなどの多様な分野で連携協力関係にある柏市との間で、包括的連携協定を締結しました。これは、情報共有と意思決定の迅速化を図り、地域社会の発展や人材育成に向けた取り組みの推進をめざすもので、千葉大学と自治体との連携協定は、千葉県、千葉市について三例目です。

平成23年10月29日に柏の葉キャンパスで行われた締結式には、秋山市長や齋藤学長をはじめとする自治体、大学関係者が参加しました。参加者や、柏市と連携して取り組んでいる「千葉大学柏の葉カレッジリンク・プログラム」の修了生約30名が見守る中、齋藤学長と秋山市長が協定書に署名し、両者の連携を緊密にし、地域のさらなる発展につなげることを誓い合いました。

当日は「カレッジリンク・プログラム」の活動報告も行われ、終了後には修了生有志による「石釜ピザクラブ」の焼きたてピザが振る舞われるなど、和やかな交流の場も設けられました。



ピザを手に語り合う齋藤学長(左)と秋山柏市長(右)



協定書を交わす齋藤学長(左)と秋山柏市長(右)

山中湖村夏季診療グループが 山梨県知事から感謝状を授与

平成23年10月20日、千葉大学医学部の山中湖夏季診療グループが、山梨県の横内正明知事から感謝状を授与されました。千葉大学医学部の前身である千葉医科大学では、昭和7年に山中湖湖畔に山中寮を開寮したのをきっかけに無料の診療所を開設し、無医村における医療奉仕、学生実習の場として、昭和24年に千葉医科大学が千葉大学医学部となった後もこの取り組みを続けてきました。

昭和32年には富士山7合目救護所が山梨県によって開設されると、この運営が千葉大学医学部に委託されました。以来、山中寮をベースキャンプとした救護所の運営は、山中寮関係者の医師と学生との共同活動として行われ、平成16年からはOBの大島医師が代表を務める山中湖村夏季救護医師団と学生との共同活動として受け継がれてきました。今回、この50年以上にわたり受け継がれた取り組みが、登山者の救護に多大な貢献をしてきたと評価され、知事からの感謝状贈呈となりました。



横内山梨県知事(左から4人目)、大島医師団代表(右から4人目)と医学部学生及び地元関係者



齋藤学長と報告者(左から中谷医学部長、齋藤学長、学生代表橋本さん、西野医学部教授)

「ソーラー・デカスロン・ヨーロッパ2012」に 千葉大学チームが出場

平成24年9月にスペインで開催される「ソーラー・デカスロン・ヨーロッパ2012(太陽光発電を使った家づくりの世界大会)」に千葉大学ソーラー・デカスロンチーム(代表・工学部川瀬貴晴教授)が出場します。ソーラーデカスロンが始まって以来、日本の大学が選定されたのは今回が初めてです。

同チームは現在、学生たちの手により、都市住宅に家庭内植物工場と水田を取り入れ、安全な食料と快適性の両立を実現。人と自然の共存の象徴であり、地域コミュニティの活性化を図る緑地を採用。太陽光の利用だけでなく、柏の葉ケミスタウムの成果を活かした健康的な居住空間の実現の3つのコンセプトを軸にした、人と環境に優しい次世代ソーラー住宅「おもてなしハウス」の試作棟を西千葉キャンパス内に建設しています。



西千葉キャンパスの試作棟

園芸学部サークルが 松戸市造園業協会会長賞を受賞

平成23年11月、第19回松戸みどり花のコンクールにおいて、園芸学部サークルの「おひさまガーデン」(代表・藤本祐矢さん、顧問教官・永瀬彩子助教)が松戸市造園業協会会長賞(学校の部)を受賞しました。この賞は、緑あふれる街づくりを奨励し、草花を育てる担い手づくりを広げて行くことを目的としており、財団法人松戸みどり花の基金より表彰されるものです。

「おひさまガーデン」は、平成22年から園芸学部D棟脇の花壇を花でいっぱいにする活動を続けており、その実績と色彩の素晴らしさが評価されました。本コンクール(学校の部)での高等教育機関からの受賞は今回が初めてという快挙です。11月11日には松戸市役所で表彰式が行われ、代表の藤本祐矢さんが出席し、表彰状を授与されました。



松戸市役所で行われた表彰式

千葉大学校友会総会で常盤商の 常盤和彦さんに感謝状贈呈

平成23年11月12日にけやき会館大ホールで千葉大学校友会総会が開催され、校友会事業報告や校友会事業計画(案)などが審議・承認されました。また、今回は千葉大学SEEDS基金への多数の寄附者の中から、特に高額な寄附をいただいた株式会社常盤商行代表取締役で千葉大学経済人倶楽部「絆」のメンバーでもある常盤和彦さん(昭和35年文理学部/現・理学部卒)に感謝状が贈呈されました。

感謝状は齋藤学長からご本人に手渡され、会場からは盛大な拍手が湧き上がりました。



壇上の齋藤学長と常盤和彦さん

千葉大学が誇る 名物講義!

第3回 伝統文化をつくる(普遍教育センター 教養展開科目) 担当: 柴佳世乃先生、兼岡理恵先生、小笠原匡先生

担当教員のプロフィール
柴佳世乃先生
千葉大学文学部教授(日本文化学科・中世文学専攻)
お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程(比較文化専攻) 単位取得退学(博士)
兼岡理恵先生
千葉大学文学部准教授(日本文化学科・古代文学専攻)
東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野博士課程 単位取得退学(博士)

小笠原匡先生
千葉大学客員教授 鼓笛講師 鷹流研究会指導講師 劇団東俳講師 能楽師和泉流狂言方、日本能楽会員、重要無形文化財総合指定保持者、能楽協会会員

講義レポート
教壇に立つ小笠原先生、学生と同じ席から同じ目線で授業に参加する柴先生、兼岡先生という形で講義は進められます。今回受講させていただいた講義は、「鬼の来迎」という実際に上演された狂言を題材とした議論型の授業です。学生にはあらかじめ課題が与えられており、それぞれがその狂言に対する意見や改善提案を発表していきます。学生たちの意見に対し、プロの演者である小笠原先生は、よく通る声で、ジョークを交えながらコメントや解説を加えていきます。最後には柴先生、兼岡先生からもコメントがあり、制作に向けての構想や制約などを含めて、さまざまな観点からの活発な議論がおこなわれました。

講義紹介
房総に伝わる文化や伝承をもとに、創作狂言を制作する授業です。狂言師である小笠原匡先生の指導のもと、伝統芸能を学びつつ台本作りや衣装・小道具の作成まで、舞台実現に向けてのさまざまな営みを共に考え、実践していきます。前期の担当は丸井敬司先生です。大学のある千葉のことをもっと知る地域の人々と親しむことを通じて地域文化を育むという趣旨で平成21年度に開講されました。



学生が作成した「千葉わらい」のポスター
この講義では、狂言の歴史や背景などの基礎を学んだ後に、舞台班、宣伝班、展示班、小道具班に分かれて、12月に公演された創作狂言舞台「千葉わらい」(千葉市文化振興財団主催)を制作しました。普通では味わえない、体験参加型の授業です。

担当教員からのメッセージ
地域をつくるためには地元や自分の居場所をよく知ることが重要です。現代の日本では疎かになりがちですが、講義を通じて千葉のことをよく理解してもらいたいと思います。最終目的の創作狂言の公演が近づいてくると、学生たちから手ごたえを感じるようになり、彼らの心の何かを揺さぶっていることを実感します。狂言の舞台を創るといって異次元の世界を体験することで、自分で考えること、自分で表現することが身に付きます。日本では千葉大学でしか学ぶことができないこの授業、何か違うことをやってみようと思う人はぜひ受講してみてください。



小笠原先生はプロの狂言演者



学生から次々に鋭い意見が出てきます



柴先生、兼岡先生から授業のまとめ

学生からのコメント
文学部日本文化学科
2年 松川瑠里子さん
昨年から受講しています。前回は宣伝班として参加しましたが、演者として参加しました。宣伝活動は大学だけでは知り合えない、さまざまな職業の人とかかわりがあって今後の人生にプラスになると思います。また、舞台に立つことで度胸もつきました。

教育学部スポーツ科学課程
4年 安江 雅彦さん
千葉の伝統文化に触れることができました。大学は県外の学生も多いのですが改めて千葉を知ることができて良かったと思います。自分たちの活動を学長や理事の先生、各施設の方にアピールするのはなかなかない機会ですので、この経験が社会に出てからも役に立つと感じています。